

草の芽句会だより

NO,117
18,5、10

噴水の水輪の上に鯉のぼり
手づくりの柏餅とて五つほど

節子

行き止まる帯曲輪への道花あざみ
刻印の残る石垣城は夏

純子

天守閣ふわりとよぎる夏の雲
新緑の城を仰げる今日の試歩

貞

どこからか老鶯競ふ城の朝
城の濠互いに絡む鯉幟

禮子

紅バラの花の重さにうつむける
木漏れ日の見返り坂をゆく日傘

剋子

新緑の樹の間隠れの小舟かな

文子

古茶新茶朝餉のあとの一刻を

見上げれば山若葉なり日本晴

芳子

麦畑つづく在所や風少し

満開のこぼれ初めし庭つつじ

範子

お茶室へ金魚の池の庭若葉

老鶯の高原の道一列に

貞子

高原の皆に遅れて蕨つむ

出席者 氏家 森 馬場 真鍋 小山
投句者 大黒 小林 吉崎 川原

城山が若葉に覆われる五月。桜もいけれど、私はこの新緑の季節が大好きである。爽やかな風にそよぐ木々の葉摺れの音、梢に群れる鳥の声。茂みには白い野バラが咲き、広場にはクロローバの絨毯が。大手門を潜る人影が増え城山の息吹が感じられるよう。「句が作りたくてなあ」と、遠くから所用をおしてやってきたり中途退席者もあつたが、全員の句が揃い充実した会報となつた。

